

Ⅲ. 舞台技術にスタッフに関わる養成・研修、資格制度の現状

1. 舞台技術に関わる養成・研修、資格制度の概要

(1) 舞台技術関連協会組織等で実施している養成・研修、資格制度の概要

1) 社団法人 日本照明家協会

[資格制度]

●舞台・テレビジョン照明技術者技能認定制度

昭和48年に設立された協会が、昭和56年に認定制度を発足させた。照明家の地位向上、権利の確立、技術水準の確保を目的としている。一級と二級を認定している。一級は原則5年以上の実務経験者、二級は初心者を対象とする。平成13年時点で一級認定者が2,237名、二級認定者が5,351名になっている。一、二級認定資格保持者は、PL法における演出空間・映像領域用器具―舞台・スタジオで使用する器具を扱うことのできる専門家として、JIS規格の中において位置づけられている。本技能認定制度は協会員以外にも門戸を開いている。また、二級については、専門学校との協定により学生の資格取得を促進している。

[研修制度・事例]

●「舞台・テレビジョン照明のための公開講座」

・中央講座

チーフクラスの照明家を目指す技能認定一級試験受験者を対象とした講座。昭和57年からスタート。創造芸術における照明の役割、他の分野の技術者と対等に話することができる知力、作業に対する均衡性の保持、安全作業などを包括した内容。二級取得後照明実務3年または照明実務5年以上を対象とする。

・地域講座

技能認定二級受験者を対象とした講座。昭和55年からスタート。協会の各支部が主体となって、開催日時、回数、講師陣について、支部地域に適合する方法を採って開催し、照明技術の普及と地域照明家のスキルアップ、地域毎の技術的偏差を是正することを目的に実施。照明家のステータスの向上、地域文化振興への寄与も視野に入れている。

・照明技術者新人公開講座

照明の世界に入ってきた新人を対象とした研修。組織の中での自己発見、自己主張の方法、創造芸術の楽しさ、安全作業の基本、論理思考の必要性などについての基本を理解する内容。毎年度初頭に実施。受講料20,000円(受講料、テキスト代等含む)。受講修了者は日本照明家協会会員として登録され、事業主の推薦と本人の申請などの手続きにより舞台・テレビジョン照明技術者技能認定二級の交付を受けることができる。

・技術研修講座

時事的な技術テーマを設定した講座。

「劇場等演出空間電気設備指針による技術研修講座」 2002年/2003年

「DMXコントローラとムービングライトの技術研修講座」全国5箇所 2003年

2) 日本舞台音響家協会

[資格制度]

●舞台機構調整士(音響)：厚生労働省認定/中央職業能力開発協会

「働く人々の有する技能を一定の基準により検定し、国として証明する技能の国家検定制度」である厚生労働省認定の国家資格で、舞台機構調整士(音響)については、2000年(平成11年)に設立された日本舞台音響家協会がその発足の核となった。中央職業能力開発協会が試験問題を作成し、各都道府県知事及び都道府県職業能力開発協会が実施する。

技術者の能力強化には国家試験の制定が一番の近道との考えのもと、日本P A技術者協議会(現 日本舞台音響家協会)、全国公立文化施設協議会(現(社)全国公立文化施設協会)、全国ホール協会、日本音響コンサルタント協会と協力して労働省(現 厚生労働省)に国家資格検定の制定を求めたことに始まる。1980年(昭和55年)に「技能検定 舞台機構調整/音響機構調整作業」の名称で一級、二級の試験を開始した。平成15年度で25回目を迎える。

過去24回の合格者は、1級が239名(合格率32.7%)、2級が934名(同48.4%)を出している。1995年(平成7年)からは3級の試験も行われるようになり、過去8回で2,110名(同49.6%)の合格者を出している。

実施場所は東京を始めとして、過去に秋田、山形、東京、神奈川、静岡、愛知、大阪、広島、高知、福岡、大分、熊本、鹿児島各府都県で実施。日本舞台音響家協会は、日本舞台音響事業共同組合、全国ホール協会、東京都公立文化施設協議会とともに、東京都における試験の実施協力団体となっている。

3級は舞台音響家の裾野を広げる意味で設けられ、専門学校が中心となって実施、厚生労働省認定の専門学生などの受検者を対象に、北海道・宮城・埼玉・東京・愛知・石川・広島などで実施され2,000人を超える合格者を出している。

現在の試験内容は、筆記試験と実技試験とがあり、実技試験が要素試験と作業試験とに分かれている。

筆記試験では、電気音響(アナログ、デジタル)、室内音響、音響機器、操作技術、録音技術、サウンドデザイン、音楽、芸能、劇場や舞台の構造、音響以外の照明、舞台機構など多くの範囲が出題されるとともに、消防法や安全衛生の問題もかならず出題される。

要素試験は実際に音を聴いて音響状態を判断したり、楽器の音や音楽を聴きわけて、楽器名を答えたり音楽の様式を求めたりするもので、洋楽のみならず邦楽も含まれる。

作業試験は、実際に劇場等で音響機器をセッティングして音楽やナレーション、効果音などを拡声する。

舞台音響技術者に求められる能力、知識は、電気音響、室内音響はもとより、関わる芸能、

芸術の分野の知識等は無論、実際の音を聴き分けて変化を判断する能力も必要とされる。上級者にはスタッフを管理する力も求められてきている。

試験内容は、技術、音楽、芸能の変化に対応するように毎年検討され、必要に応じて変更される。

合格者には、各級の舞台機構調整技能士の称号のほか、職業訓練指導員試験の受験資格、職業訓練指導員試験の実技試験の受験免除（一級合格者は、学科試験の関連学科についても免除）、労働大臣が指定する講習を修了した場合、職業訓練指導員免許が付与されるなどの特典がある。

[研修制度・事例]

●舞台音響家のための基礎講座

毎年4月に2日間程度行われる研修。音響技術だけではなく、舞台美術、照明技術の基礎やコミュニケーションの取り方というような社会人の基礎知識も学べる内容。参加資格は、舞台音響業務経験3年以内、あるいは将来舞台音響家を目指す学生。未経験者は参加不可。

●PAS ワークショップ

「プロオーディオにおける録音再生媒体の近未来」 2002年

●演劇音響効果プランナー養成講座

毎年9月に3日間程度実施される研修。

●音響技術ワークショップ／音響技術講習／セミナー

「コンパクトラインアレイ研究会」 2003年

「劇場用コンパクトラインアレイスピーカの検証」 2002年

「建築音響の基礎と電機音響測定技術を考える」 2002年

「テクニカルアドベンチャー／音響ワークショップ」 2001年

「これでいいのか!? モニターシステム」 2000年

●最新音響機器展

●全国公立文化施設協会の技術研修会への協力 2001年／2003年

3) 日本音響家協会

[研修・資格制度・事例]

音響家技能認定講座の内容

優秀な舞台技術者の育成のため、1990年から舞台芸術の創造に携る音響家の技巧と芸術的表現力を訓練するための「音響家技能認定講座」を実施しており、1997年度からは、音響家技能認定講座の中で行う試験で音響技術者の能力を検定して、技能認定を行っている。講座の効果測定として位置づけられている。

音響家技能認定講座には、[ビギナーズコース] [ベーシックコース] [オペレータコース] [サウンドシステムチューナコース] の4つのコースがある。認定者数は以下の通り

1 級音響技術者	209 名
2 級音響技術者	510 名
3 級音響技術者	731 名
サウンドシステムチューナ	21 名

●オペレータコース（1 級音響技術者技能認定）

音響デザイナーのイメージを具現するために、音響機器を操作するサウンドオペレータに必要な集中力と芸術的表現力を訓練する。実習は、できるまで丁寧に指導し、修了後に筆記試験を行い、1 級音響技術者の技能を認定する。

受講資格は、2 級音響技術者に認定されてから引き続き 3 年以上の実務経験を有する者

*1 年間に 8 ヶ月以上、舞台や放送局などで音響の仕事をしたとき、音響実務経験 1 年とする。経歴書の提出が必要。

受講料：18,900 円（日本音響家協会会員 9,450 円）検定料と認定証の製作費を含む。

日程は 2 日間

●ベーシックコース（2 級音響技術者技能認定）

舞台において音響機器の仕込み及び撤収、場面転換の業務を行う音響技術者に必要な基本的な知識と作法を指導する。修了後、講義の理解度テストと実技試験を行い、2 級音響技術者の技能を認定する。初歩的な電気知識、デシベルの知識やフレミング右手の法則などについては、予習が必要。

受講資格は 1 年以上の実務経験者であること。

受講料：15,750 円（日本音響家協会会員 8,400 円）。教科書代金と検定料、認定証発行の経費を含む。

日程は 2 日間

●ビギナーズコース（3 級音響技術者技能認定）

初めて舞台で仕事をする人達を対象に、リーダーの指示に従い、音響の仕事の補助作業ができるように指導。すべて実技講習。修了者は 3 級音響技術者として技能を認定する。

受講資格は実務経験の有無を問わない。

受講料：10,500 円（日本音響家協会会員 5,250 円）

日程は 1 日

●サウンドシステムチューナコース（サウンドシステムチューナ技能認定対象）

正しくシステム設計をすることができ、その性能を十分に発揮させるために的確な調整ができる能力を有する技術者を認定する。

受講資格は 2 級音響技術者の認定を受けてから引き続き 3 年以上の実務経験を有する者、またはシステムチューニングの業務を 5 年以上行っている者。

受講料：18,900 円（日本音響家協会会員は 9,450 円）検定料と認定証製作費を含む。

日程は 2 日間

協会支部主催のセミナー

- ジャズ音響塾
- 音響家のための「邦楽セミナー」2004年
- 東日本支部技術セミナー「立体音響・人の心をふるわせる」2003年
- 西日本支部「オペラ・サウンドセミナー」2000年～

(2) その他の養成・研修機会の概要

舞台技術に関わる養成・研修機会は、大きく、協会組織、劇場・ホール、地方公共団体、劇団、大学、専門学校、一部高等学校などで行われている。対象、内容、期間ともにそれぞれ異なるが、大学、専門学校、高等学校では授業の一環として行われており、その他は、専門家対象のもの、ボランティアスタッフ育成目的のもの、生涯教育の一環としてカルチャーセミナーのようなものとして実施されているものなどがある。以下に主催者および研修機会の名称、学校の場合には学部学科等の名称を列挙する。(内容等の詳細は巻末の資料を参照のこと)

●協会系統

協会員のみが参加できるもの、協会員以外にも門戸を開くもの、普及啓発の観点からアマチュア対象に行うものなどがある。

主催者	名称
(社)全国公立文化施設協会	全国公立文化施設アートマネジメント研修会 全国公立文化施設技術職員研修会 ブロック別技術職員研修会
(財)地域創造	ステージクラフト
(社)日本照明家協会 日本舞台音響家協会 日本音響家協会	*前項で紹介
全国舞台テレビ照明事業協同組合	World Lighting Fairセミナー
舞台運用研究会	舞台運用研究会セミナー
日本舞台技術総合研究センター	舞台技術セミナーほか
愛知県舞台運営事業共同組合	愛知県舞台技術者セミナー/ベーシックセミナー/劇場管理業務講習会
(特非)日本舞台技術安全協会(JASST)	安全セミナー・安全シンポジウムほか

●劇場／ホール／地方公共団体系統

基本的には、生涯学習の一環として地域住民が誰でも参加できる体験機会の性格を持つケースが多いが、専門家を目指す人材を対象とするものから、地域の劇場での技術ボランティアを育成するためのもの、中には小中学生が舞台技術を体験するものもある。

主催者	名称
北海道舞台塾ふらの・そらち実行委員会 /滝川市教育委員会	舞台美術・技術講座 『早回し演劇公演』～舞台づくりを体験しよう!
北海道文化財団 北海道舞台塾実行委員会	北海道舞台塾
北海道北広島市芸術文化ホールのボランティア組織	花ホールスタッフの会
十和田市民文化センター	十和田ステージクリエート
(特非)ふたいサポート・みやぎNPO	舞台技術ワークショップ
仙台市市民文化事業団	舞台技術総合講座 演劇道場
喜多方プラザ文化センター	舞台研究会“うらかた”
宇都宮ジュニアミュージカル実行委員会	宇都宮ジュニアミュージカルスクール指導者養成講座
日生劇場/財団法人 ニッセイ文化振興財団	日生劇場舞台フォーラム
世田谷パブリックシアター	舞台技術者養成講座 劇場を経験しよう～デザインのワークショップ

神奈川県県民部文化課文化事業班	舞台技術者養成講座 劇場を経験しよう～公開講座～ かながわ舞台技術ワークショップ 劇場技術の現在 (いま) ～新しい劇場・ホール管理技術を目指して～
(財)埼玉県芸術文化振興財団	ステージラフト～舞台技術ワークショップ～
村上市民ふれあいセンター	あつまれ!BOYS&GIRLS～舞台機構・音響照明体験会～「演劇を作ろう」
富山県公立文化施設協議会	レベルアップ講座 (舞台における実技研修)
(財)岐阜県産業文化振興事業団 地域文化研究所	ぎふイベント道場、専門研修
茨木市立男女共生センターローズWAM	BUTABORA
兵庫県立尼崎青少年創造劇場[ピッコロシアター]	ピッコロ舞台技術学校
稲美町文化会館コスモホール	コスモホールオペレータークラブ
岡山舞台芸術ゼミナール実行委員会	岡山舞台芸術ゼミナール
(財)広島市文化財団 南区民文化センター	舞台技術ワークショップ
山口情報芸術センター	ステージ・テクニカル・ワークショップVol.1 舞台照明基礎講座
高松市生涯学習センター	舞台技術講座
高知県立県民文化ホール	高校演劇に対する技術支援
高知県立県民文化ホール	県民文化ホールを使用した技術者の育成
野市町(高知県)のいちふれあいセンターサンホール	サンホール技術研修
(財)熊本県立劇場	

●劇団等の系統

劇団所属の舞台技術者を育成する場合と、劇団活動の一環としてワークショップ等を実施する場
合がある。

主催者	名称
円・演劇研究所	
劇団青年座研究所	舞台技術科
文学座附属演劇研究所	演出部 (演出・舞台監督・美術<衣装を含む>・照明・音響効果)
(有)アゴラ企画・こまばアゴラ劇場	舞台美術と空間のワークショップ
t p t (シアター・プロジェクト・東京)	アーティスト・ワークショップ
スタッフ塾実行委員会	アイカワマサアキ スタッフ塾

●高等学校系統

舞台芸術に関わる学科を持つ高等学校が実習を伴いながら舞台技術全般について学んでいる。

主催者	名称
埼玉県立芸術総合高等学校	舞台芸術科
三重県立名張高等学校	総合学科 芸術メディア系統
宝塚北高等学校	演劇科

●専門学校系統

コンサート、イベントに関わる学科、コースが多く、特に音響に関する事例が多く見られる。
前述のように協会組織との連携により、在学中に資格取得が行えるようなカリキュラムを組んでい
る場合もある。

主催者	名称
経専学園放送芸術専門学校	音楽・放送芸術科コンサート・イベントコース
専門学校札幌ビジュアルアーツ	音響学科コンサートイベント専攻 ステージライティング専攻/サウンドテクニク専攻
デジタルアーツ仙台	ステージクリエイティブ学科 (コンサートプロデュースコース、舞台美術コース)
専門学校日本ビジネススクール仙台校	サウンドアートビジネス学科 コンサート・イベントプロデュースコース
専門学校創表現研究所 e s t	エンターテイメント表現学系 ステージプロデュース学科
東京工学院専門学校	音響メディア学科・エンターテイメント科
東京情報ビジネス専門学校	音響ビジネス科
東京ミュージック&メディアアーツ尚美	音響映像学科

日本工学院専門学校	演劇スタッフ科/音響芸術科
日本デザイナー学院	芸能デザイン科
東放学園音響専門学校	音響技術科
東放学園専門学校	照明クリエイティブ科
ESPミュージカルアカデミー	音響アーティスト科、音楽イベント科コンサート制作コース・コンサート照明コース
東京照明技術学院	
音響技術専門学校	制作芸術科 音楽プロデュースコンサート&イベント科
専門学校デジタルアーツ東京	イベント学科
東京スクールオブミュージック専門学校	音楽テクノロジー科 音楽イベント&コンサート企画コース PAエンジニアコース/ステージライティングコース/舞台制作コース
東京ビジュアルアーツ	音響学科
日本電子専門学校	ライブ・イベント科
ミューズ音楽院	ミキシング・クリエイター科
昭和音楽芸術学院	舞台芸術科
国際音楽エンタテイメント専門学校	コンサート・イベントプロデュース学科
金沢科学技術専門学校	映像音響学科
コンピュータ総合学園HAL名古屋	ミュージック学科 コンサート・ステージ技術専攻
トライデントコンピュータ専門学校	ミュージック学科 サウンドエンジニア専攻
名古屋コミュニケーションアート専門学校	商業音楽科 PAエンジニアコース 音楽イベント&コンサート企画コース /ステージライティングコース
名古屋ビジュアルアーツ	音響芸術学科 コンサート・ステージ制作
名古屋工学院専門学校	音響映像学科
大阪スクールオブミュージック専門学校	商業音楽科 PAエンジニアコース 音楽イベント&コンサート企画コース /ステージライティングコース
大阪電子専門学校	サウンドクリエイター分野 舞台芸術コース
キャットミュージックカレッジ専門学校	音楽技術学科 音響エンジニア専攻 (PA/レコーディング/放送) ライティングスタッフ専攻
コンピュータ総合学園HAL大阪	ミュージック学科 コンサート・ステージ技術専攻
日本写真映像専門学校	映像クリエイション学科 舞台製作コース
ビジュアルアーツ専門学校 大阪	音響芸術学科
放送芸術学院	コンサート舞台制作科
神戸電子専門学校	サウンドテクニック学科
京都科学技術専門学校	映像音響学科
広島工業大学専門学校	
広島コンピュータ専門学校	音響技術コース
福岡スクールオブミュージック専門学校	商業音楽科 PAエンジニアコース 音楽イベント&コンサート企画コース /ステージライティングコース
九州ビジュアルアーツ	音響学科 コンサートステージ専攻

●大学系統

芸術大学及び芸術系の学部、学科を持つ大学で舞台技術に関するコース、講座などが設置されている。大学によっては外部の劇場や舞台技術会社との連携によって実習を行う場合もある。

主催者	名称
筑波大学	芸術専門学群総合造形
東京芸術大学	音楽学部音楽環境創造科
日本大学芸術学部	演劇学科
玉川大学	芸術学部 パフォーマンス・アーツ学科
多摩美術大学	造形表現学部 映像演劇学科
桐朋学園大学芸術短期大学部	演劇専攻 ステージ・クリエイト専攻
早稲田大学	文学部
駿河台大学	文化情報学部
尚美学園大学	芸術情報学部 情報表現学科 音響表現
四日市大学	環境情報学部 メディアコミュニケーション学科
近畿大学	芸術学部

大阪芸術大学	舞台芸術学科
京都造形芸術大学	映像・舞台芸術学科
宝塚造形芸術大学	映像造形学科
福岡女学院大学	表現学科 パフォーミングアーツコース

どのような目的で、誰を対象にどのような研修を行うのか、上記事例を見ても様々なケースがある。一般市民の舞台技術、広くは舞台芸術への興味関心を喚起することも重要であるし、舞台技術者を志向する若者がその世界に触れ、基礎を固めるという点からも多様な研修機会が持たれることが望ましい。本調査研究の主眼である、プロに対する養成、研修機会として捉えると、協会組織、地方公共団体、学校、芸術団体などがそれぞれに個性を持った活動を行っているが、実施についての要素を見ていくと以下のように考えられる。

養成、研修機会を構成する要素

主催者	協会組織／地方公共団体／NPO／劇場・ホール／学校
地域	1カ所のみか単発か、複数地域で開催するのか
回数	1回のみか、同内容のものを複数回行うのか または、カリキュラム編成により総合的に行うのか
日数	数時間～1日か複数日か
場所	劇場・ホールなどで行うか否か
取り扱うテーマ	舞台ジャンル別か、個別技術か
対象者	対象を限定するか否か
内容	座学か実技か、最新機器などの体験か 舞台技術そのものを扱うか、舞台技術者に必要な周辺の知識、 技術を扱うか
参加費用	有料か無料か
認定等	研修の効果測定などの後に認定資格等を付与するか否か
必要経費の調達	公的資金の有無

以上の要素を組み合わせていくことによって様々な養成、研修機会を想定することもできるが、現状においては、主催者や参加者の双方に制約条件があることによって、実現できていないこともあると考えられる。これらの要素と制約条件を検討、解決していくことによって、養成、研修に必要な環境整備を考えていくことができよう。